



# 絶対感謝①

私たちが  
どのような世界で  
生かされているのかを  
知ることが、  
「絶対感謝」への  
第一歩です。



**み教え調査隊とは**  
いつも耳にするけど、実はよく分からない——そんな「解脱用語」を調査し、教えの理解を深めるべく秘密裏に結成された特別調査チーム。毎回金剛さまの遺されたご指導を読み解き、時に取材に繰り出して、調査した結果を誌面にて報告する。

# なんでも感謝!?

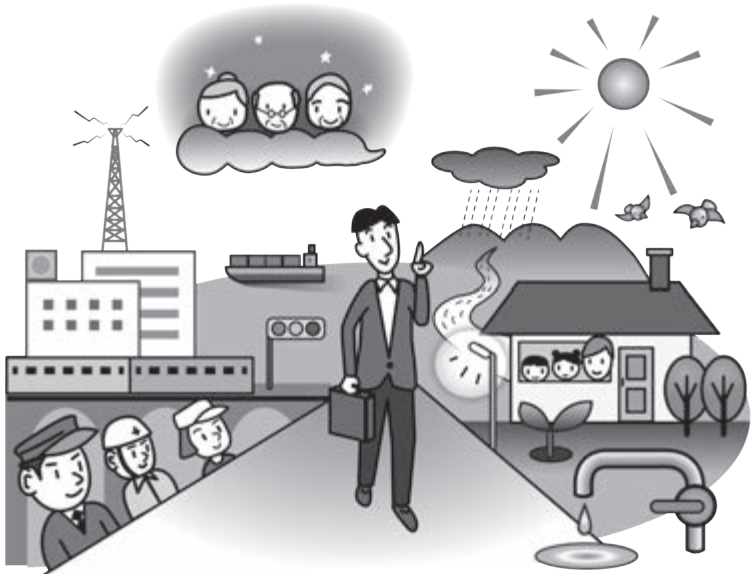


広井学 ●有賀さん、難しい顔してどうしたの？  
有賀冬子 ●新しい依頼状が届いたんだけど、私も「感謝」ってあるのよ。  
白辺隊長 ●読んでみてくれるかな。  
有賀 ●「私の職場は最悪です。みんな自分勝手に、真面目で頼みやすい私にばかり仕事を押し付け、本当に損しているような気持ちになり、いつも職場の愚痴を言っています。」「絶対感謝」と言いますが、こんな会社にもやはり感謝しなくてはいいないのでしょっか。」ですって。分

かるわ、この気持ち。真面目な人ほど損しているような気がするのよね。  
隊長 ●なるほど。それは感謝とは程遠い気持ちだね。  
広井 ●金剛さまは、「絶対的に報恩感謝で進まれたなら実に朗らかである」(『ご聖訓』第一巻20頁)「感謝で過ごせば真に安心立命を得らるる」(『惟神之大道』と、感謝すれば幸せになるとおっしゃっている。そりゃあそうだけど、感謝できないことにごう感謝すりゃいいんだよって思うよなあ。  
隊長 ●解脱の教えでは「難あつて有り難し」といって、「絶対感謝」になりきれたら本当に幸せになれるし、金剛さまは誰でもそうなるとおっしゃっているね。  
有賀 ●そうだけど、なんか無理矢理「感謝」と思って疲れちゃう時があるの。もっと心から「感謝」と思いたいわ。

広井 ●僕なんて「感謝、感謝」と言いつつ、心ではいつも愚痴ばかり言っているかも(苦笑)。  
隊長 ●君たちだけじゃないと思うな。これは調査のしがいがあると思うだ。





また、学生時代には教師や学友、社会人になれば職場の上司や先輩、同僚など、人生のさまざまな場面で

あなたを教え導いてくれた「師」と呼べる存在がいたはず。そもそも、最初から何でもできる人間なんて一人もいません。自分

では覚えていなくても、ただ泣くことしかできない赤ん坊の頃は、一切の面倒をもらわなければ生きていけなかったのです。それから、トイレでの用の足し方やお箸の使い方など、さまざまな一つひとつのことを教わって身につけ、ようやく今のように人間らしい暮らしができるようになったのです。

何より、あなたという人間がこの世に誕生できたこと自体、父と母、そして脈々と命のバトンをつなげてきてくれた無数

のご先祖さまがいてくれたからです。そして、日本という国をひらき、今日まで国を発展させ守ってきた人々のお蔭です。

私たちの誰にも共通する根本の恩恵を、金剛さまは「三綱五常報恩」と示されています。これら恩恵のすべてを実感することは難しく、私たちが受けとれるのは氷山の一角に過ぎません。それは「報じても報じ難い」ほど大きいのです。



隊長 ● じゃあ、二人はどんなことであれば感謝できると思う？

広井 ● そつだなあ。たとえば、何かのお祝いにプレゼントをもらった時なんかは「嬉しい、ありがとう〜」って自然と思えるかな。

有賀 ● 私も、自分が困っていたところを助けてもらった時や、仕事がつましく運んで良い結果を頂けた時なんかは、支えてくれる人の有り難さを感じるわ。やっぱり、自分にとって「嬉しい出来事」があった時なら、

誰だって感謝できるわよね。

隊長 ● なるほどね。じゃあ聞くけど、自分にとって特別都合の良いことも悪いことも、どちらも起こっていない時はどうだろう。

広井 ● え？ 何も起こっていないんだから、別に何とも思いませんよ。

隊長 ● 本当にそつかな？

有賀 ● もしかして、何事もなく無事に過ごしていること自体が「有り難い」ってことですか？

隊長 ● 有賀さん、よく気がついたね。

そもそも、難の有る無しにかかわらず、僕らが「当たり前」と思って過ごしている毎日、それ自体が感謝の対象なんだよ。

### 「当たり前」が有り難い

「この身は無量の恩の結晶であります」(『ご聖訓』第七卷73頁)と金剛さまが申されているとおり、私たちは数えきれないほどの「恩」によっ

て生かされている存在です。

たとえば、もしも空気がなくなってしまうたら、私たちは一瞬たりとも生きてはいられません。太陽の光や大地、水、火、風など、自然界の営みはどれも生きるために欠かせないものばかりです。また、私たちの住んでいる家も身にまとう服も毎日の食事、素材をたどれば、すべて大自然の恵みからできています。

次に、生活に必要な物やサービスについて考えてみましょう。たった一枚の洋服でさえ、まず糸を作る人から、布を織る人、服を縫製する人、運送業者、販売店など、大勢の「他人」の手を経て、ようやく私たちは着ることが出来ます。蛇口をひねればきれいな水が出るのも、電車やバスなどの交通網も、初めから存在したわけではありません。インフラを整備してくれた先人の苦勞の上に、私たちの便利な生活があります。



それなのに、私たちはこれらに對して「感謝」を忘れてしまいがちで、つい「当たり前」のように感じてしまつてはいないでしょうか。

### 緑の平野で枯れ草を食う

金剛さまはある時、「雨の漏らないう屋根のある家に住まわせていただいて、着るものも季節に応じて着させていたでいて、毎日毎日、二度三度の温かいものを食べさせていたたくのが、最高の感謝の生活なんだよ」と仰せになり、それを聞いた會員が「先生（金剛さま）、それは当たり前のことじゃないですか」と言つた。「当たり前」のことを有り難いなあと思つ心が、感謝の生活なんだよ」と重ねておつしやられたそうです。

かのマザー・テレサは「愛の反対は無関心である」と言つていますが、では「感謝」の反対は何かといえは、すべてを「当たり前」に感じる心です。

はないでしょうか。三綱五常報恩を振り返つても、どれも私たちが生きる上で不可欠なものでありながら、無条件に惜しみなく与えられています。だからこそ、与えられることが「当たり前」になり、感謝を忘れてしまいがちなのもかもしれません。

そもそも、「感謝」といつ言葉は、単なる「ありがと」とは違います。こんな私に対してこれほどのことをしていただいて「もったいない、申し訳ない」と思うような、とても深い言葉です。自分が生きていくために欠かせないものに向けられるのに、これほど相応しい言葉はありません。

「感謝をどこかに置き去りにした生活は、緑の平野に立ちながら、わざわざ枯れ草を食うようなものです」（『聖訓』第五巻81頁）

私たちの生きる世界は無数の恩恵に満ちています。そのことに気がつかず不平不満の心で過ごしてければ、

## 難あつて有り難し

有賀●もじ、「与えられているすべては神様からの恩恵」って受け取り方をするなら、苦難も神様から与えられたものになるのかな。だとしたら、やっぱり感謝と受け取らないといけないのですよね。

隊長●そつだね。金剛さまは「難あつて有り難し」と申されている。この言葉にはどんな意味が込められているのか、探つてみよう。

### この世は修行の場

金剛さまは「生命ある実体は死滅するが靈魂は不滅で唯その流転変化だけが認められる」（『真行』17頁）と申され、死んでもなお魂は存在し、魂は不滅であることが示されており

ます。

この不滅の魂を持つ私たちは、なぜこの世に生まれ出でるのでしょうか。それはこの世が「魂を磨き、鍛えることができる場所」であるからです。

この世で生きている間は「肉体を有ち幾多生活の拘束下にある」（『真行』36頁）と金剛さまが示されているように、私たちはあらゆる制約の中で生きています。

たとえば、大いなる自然の中で、天候の変化に左右され、地震や津波等の自然災害の脅威にさらされながらも自然に逆らわずに共存していかなければなりません。また、一人では生きられない人間は、考えの異なる者同士が寄り集まる社会の中で生きざるを得ず、その上、生身の肉体を持つことで、仏教でいう生老病死の苦しみから逃れることはできません。

このように、苦難を避けることが

このみさとしのとおり、せっかくの美味しい緑の草が枯れ草のようにしか味わえないのです。どんな場面でも自分が頂いている恩恵に気づけることは、明るく前向きな感謝の毎日を通す秘訣なのです。

広井●「当たり前」が一番有り難いことか……なるほどなあ。

有賀●普段、「あれが欲しい」「これがあったら」と無いものばかり数えがちだけど、私たちはすでに生きていくために本当に必要なものを充分に与えられているのよね。

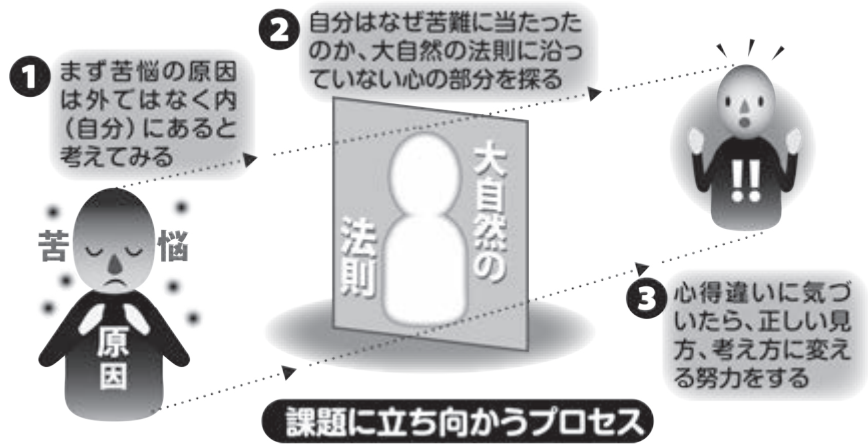
広井●当たり前と思いがちなものこそ「感謝する大切さ」はよく分かったよ。でも、やっぱり苦しいことや辛いこと、自分に都合の悪いことにも感謝するっていうのは、まだよく分からないなあ。

隊長●じゃあ、そのあたりについてさらに詳しく考えてみようか。

できず、思い通りにはならないこの世だからこそ、魂を磨き、鍛える修業の場として最高の場所なのです。そもそも人間の持つ魂とは、どのようなものなのでしょう。

人とは「神の分身靈」（『真行』7頁）であると金剛さまが示されているとおり、私たちの魂の中心核には





神の心(神魂)があります。この神の心とは、どのようなものかといえば、具体的には「人のために行うことを喜べる心、他人が行う善行を見て感動する心、逆に他人から受けた恩に報いたいと思う心」等で、これらは誰もが持ち合わせている心です。このように素晴らしい神の心を持っている私たちですが、実際は先祖代々からの心のクセや自身の自我欲によって自らの魂をくもらせてしまっている状態なのです。

このくもらせている魂を磨き、鍛えるために与えられるのが「苦難」です。魂をダイヤモンドの原石とすれば、苦難は磨くための研磨材であり、きれいにするために苦痛をとまいません。しかし、その痛みに耐え、磨けば磨くほど光らせることができるのです。

このように、自分にとって都合の悪いことや辛く苦しいと思うことは

魂を磨き、鍛えるために与えられた「課題」と受け取っていくことが大切です。

具体的にどのようなことを、ある課題を与えられたKさんの実例から考えていきます。

Kさんは、職場で一番苦手な同僚となぜか毎回仕事を組まされることになり、嫌なのに避けられない状況に大きなストレスを感じ、「なぜ一番苦手な人と一緒にさせられるのか」と疑問に思ったそうです。

ここで、もし自分の課題と受け取れなければ、常に相手や周囲を責め、いつも不平不満の心に苛まれることになります。

しかし、この時Kさんは、苦手な人から逃れられないことを自分の課題と捉え、自己の姿を振り返ってみたそうです。すると、自分の心の中に「苦手な人をすぐに切り捨ててしまおう」と思っていたことに気づ

いたといいます。

そこでKさんはまず、相手を毛嫌いせずに「こういう人もいるんだな」と認めることから始め、切り捨てない努力をしました。それから、その人の嫌な一面だけを見ずに、多方面から見ようとしたところ、その人自分にはない良いところも見えてきたといいます。今では相手を尊重する気持ちに変わり、ストレスに感じることがなくなりました。

そもそもなぜKさんは、このような課題を与えられたのでしょうか。

それは、「相手を嫌い、切り捨てる行為」は、大自然の法則である調和から外れていることですので、そこに気づき改善させることと同時に、思い通りにならないことから逃げずに立ち向かうことで、魂を磨き、鍛え、人格完成へと導くためです。これは「難」によって成長させようとの、神の慈悲の現れなのです。

**難**にまつ「お蔭」に気づける...

恩恵の中で生かされている自覚は、日常生活を送る中で、どうしても薄れてしまうものです。

たとえば体が不調になった時、風邪を引いた程度でも普段の健康な時にできていたことができなくなります。その時によりやく健康の有り難さ、また病院の有り難さ、心配して手を差し伸べてくれる人の有り難さに気づくことができるものです。

このように難は、普段忘れがちな「お蔭」に気づかせてくれるためのものであり、当たり前と思えることに感謝を忘れないためにも「難」が必要なのです。

相応しく与えられた「今」に感謝する心を忘れない自分になっていくことが絶対感謝への道です。

**有賀** ●「難あって有り難し」の意味

が分かった気がする。難があるからこそ大自然の法則に外れている自分に気づいて修正ができるし、お蔭を忘れて自分にも気づくことができるんだね。

**広井** ●難は自分の魂を磨くために与えられた成長材料だって考えたら、感謝で受け入れられそうだよ。

**隊長** ●だからすべてに絶対感謝！ということだね。

**広井** ●依頼状の人もこの仕組みから考えてみたら絶対感謝に思えるかな。

**有賀** ●でもさ、この仕組みは分かっても、実生活の中で理不尽なことが目の前で起こった時とか、周囲の人と自分を比べてしまうと、不平不満を言いたくなってしまふ気がするの。

**隊長** ●分かっているてもそう簡単にできるものではないのが絶対感謝なんだな。来月号では、どうすれば絶対感謝の生活ができるか、もう少し探ってみよう！